

博士論文要約

題目：「近代の着物における黒留袖・訪問服（着）の成立と格付け意識の形成」

氏名：古川 咲

近代の着物に関する研究については、概説的に行われた研究、或いは特定の種類や模様に着目した研究、民俗的な部分で語られる研究に留まっている。それゆえ、近代における着物は、どのような種類の着物が存在し、それぞれが近代の中でどのような変遷過程を辿ったかについては、明らかにされていない現状にある。また、併せて、それがどのように現代の着物と繋がっているかについては、ほとんど論じられてきていない。そこで本研究は、以下の2点を研究目的とした。

まず、1つ目に現代の着物の種類のうち、礼装に位置付けられる黒留袖と準礼装に位置付けられる訪問服（着）の成立過程について明らかにすることを目的とした。これは、黒留袖と訪問服（着）に繋がる着物の出現及びその変遷が、近代の着物の格付け意識の形成に重要な意味を持っていたからである。

また、現代においては、着ていく場（場面）や目的に応じ、どのような着物を着用するかが決まっている。しかし、近世において、近代の着物に繋がる町人女性の小袖は、特別な日である「ハレ」と、日常である「ケ」を区分し、衣服を着分けることはあっても、現代のような細かな着分けはなかったと考えられる。従って、場（場面）に合わせた着物を選択するという意識、及び場（場面）に応じた着物の格式を配慮する概念が生まれたのは近代になってからと言える。よって、本研究では、近代における格付けの意識、つまりは場（場面）に応じた着物を選択するという意識が、いつ、どのように一般の女性たちに根付き、形成されていったかを明らかにすることを2つ目の目的とした。

以下、本論文の第1章から第5章までを要約する。

第1章では、本研究の目的及び各章での研究内容について述べた。

第2章では近代以前である、江戸時代後期における小袖の種類及び小袖の着分けの状況について、江戸時代後期の風俗が詳細に記されている『守貞漫稿』から考察した。江戸時代後期の町人女性の小袖は、「礼・晴・略・褻」に大別された4つの種類であることを確認した。またこの4つの区分は、小袖の種類における順位を示すものであり、第一に生地（素材）、第二に小袖の上に表される紋の有無や柄（加飾技法）によって順位付けがされていることを明らかにした。江戸時代後期においては、今日のように場（場面）とそこに着ていく着物を結びつけた厳密な決まりはなく、身分や経済力に応じて、小袖の着分けが行われていたことを明らかにした。

第3章では、今日の礼装に位置付けられる黒留袖の成立過程を明らかにした。今日の黒留袖に繋がる衣服形式が、明治時代には「白襟紋付」と呼ばれる衣服形式に含まれるものであったことから、まずは「白襟」つまりは「白襟の下着、及び襦袢」の着装が礼装と見なされるようになった起源について考察した。白の下着を着用する衣服形式は格式が高いという認識は、江戸時代・17世紀中頃までにはすでに持たれていたことを明らかにした。また、それが江戸時代・19世紀中頃には町人女性のフォーマルを示す衣服形式になっていたことも明らかにした。次に、今日の「黒留袖」（黒紋

付裾模様の留袖)の成立過程を黒色という地色、及び留袖という衣服形態から考察した。まず、黒の地色が礼装として見做されるようになるのは、明治時代後期以降であることを明らかにした。次に、「留袖」が礼装として認められる過程については、1 つ目に大正時代後期に、模様配置の点で留袖が振袖と分離したこと、2 つ目に同時期に合理主義や儉約主義の思想を反映して、明治時代以前に持たれていた留袖に対する認識、つまりは、留袖は「略式」であるとする認識が取り去られたこと、3 つ目に戦時中において、留袖が時局に相応しいものとして、礼装の意味を高めていったことが、今日の黒留袖の成立に影響していたことを明らかにした。

第 4 章では、今日の準礼装に位置付けられる訪問服(着)の成立過程を近代に刊行された新聞、雑誌、呉服屋発行の PR 誌等から考察した。訪問服(着)の成立過程については、以下の 4 点を明らかにした。(1)明治時代中期に登場した訪問服(着)は、江戸時代後期の小紋染の小袖を受け継いでいたこと、(2)大正時代・中後期に模様配置の点において、自由な訪問服(着)が積極的に生み出されるようになったこと、(3)大正時代末期から昭和時代初期に訪問服(着)の中でも、礼服寄りの訪問服(着)と日常着寄りの訪問服(着)へと分化していったこと、(4)昭和 16(1941)年に文部省より出された礼法要項によって、今日の準礼装としての位置付けを持つようになった可能性があることを明らかにした。

第 5 章では、第 3 章、第 4 章を基に着物の格付け意識の形成過程について考察した。近代において場(場面)に応じた着物を選択する意識の形成については、以下の 5 つの段階が見られた。第 1 段階は、明治時代に庶民が国家的行事に参加していく中で場(場面)に応じた着物を着用することを意識する段階である。第 2 段階は、明治 30 年代半ばから明治 40 年代にかけて場(場面)に応じた着物を女性たち自身が解釈し始める段階である。第 3 段階は、大正時代以降に訪問服(着)という新たな着物を通じて、女性たちが場(場面)に応じた着物を自由に作り出していった段階である。第 4 段階は、大正時代末期から女性たちが場(場面)の内容を考慮し、それに応じた訪問服(着)を細分化していった段階である。第 5 段階では、昭和時代前期に様々な場(場面)と着物の種類が増えた結果、場(場面)とそこに着ていく着物について助言する職業婦人たちが出てくる段階である。以上の段階を経て、場(場面)に応じて着物を着分けるという「着物の格付け意識」が形成されていったことを明らかにした。

以上の成果によって、本研究は近世からの小袖の歴史的な系譜を現代まで繋げた基礎的研究となり、今後の近代着物に関する研究の発展に寄与することができたと考える。